

a 学校教育目標	夢に向かって ともに学び ともに伸びる子どもの育成 ～ かがやけ南 心はひとつ ～	b 経営理念 (ミッション・ビジョン)	【ミッション】(自校の使命) 夢を持ち、未来を切り拓く子どもの育成 【ビジョン】(自校の将来像) みんなの笑顔があふれる、安心・安全な学校 自分や相手のよさを理解し協力して活動できる子ども 児童理解に努め、個々の力の向上に向け切磋琢磨し挑戦する教職員
-------------	--	------------------------	--

評価計画				自己評価				改善方針		学校関係者評価					
c 中期経営 目標	d 短期経営 目標	e 目標達成のための方策	f 評価項目・指標	g 目標値	8月	2月	i	j 評価	k 結果と課題の分析	n 改善方針	l 評価			m コメント	
					h達成値	h達成値	達成度				イ	ロ	ハ		
確かな学力	主体的・対話的で深い学びを追求する	自ら考え学ぶ 合う児童	○改善の視点を明確にした、子ども起点の授業づくり ・「問いの設定と探究」を視点にした授業改善を着実に進める。 ・授業・学力向上に係るICTの効果的な活用方法を追求する。 ○基礎学力の定着の徹底と個に応じた個別指導の充実 ・「チャレンジタイム」「やればできるっ！検定」「きいてねタイム」で個別目標を設定し、年間を通じて継続実施する。	○単元末テスト(国・算)の学校平均点 8月…4月～7月分(1学期) 2月…9月～12月分(2学期) ① ○児童アンケート調査 ・「自分の考えを図・式・ことばなどで友達に伝えることができた」と肯定的に解答する児童の割合 ・「算数の授業がよく分かる」と肯定的に回答する児童の割合 ②	各教科・項目ともに80%以上	国86算82	国87算81	国108.7算101.2	B	○学年別に見ると、5年生算数科(79)6年生算数科(71)と、2学年が目標値に達していない。低学年からの四則計算の定着や、全教職員の授業力が課題である。 ○自分の考えを図・式・言葉などで友達に伝えることができる割合が前回より2%低くなっている。 表現方法を使って答えを導き出すことができても、全体へ向けて話すことに困難を抱えている児童が多くなるのではないかと考える。	○算数科の教育研究を通して、新しい単元に入る前には、その単元に関わる既習事項を復習して、個々のレディネスを高めスタートラインを揃え、問題解決者として自立させ、授業に参加させる。 ○チャレンジタイムの中で、それぞれの学年に必要な表現方法を学年で統一して反復練習する。 ○来年度に向けて、チャレンジタイムでアシストシートに取り組み。 ○宿題の直しや「やればできる検定」を最後までやり切らせ、粘り強く課題に取り組む習慣をつける。 ○学びに参加する基本的な姿勢(声の大きさ・学習規律)を学校全体で統一し、どの子も話しやすい雰囲気づくりや、個々の話す力の向上を目指す。	○			・児童が落ち着いて授業に取り組んでいた。低学年の児童が、図や式を使って自分の考えを説明している姿に感心した。 ・教師は、児童の考えのよさを認めながら指導を進めていた。日々の取組の成果が表れてきていると感じた。 ・数値だけではなく、プロセスを大切にしながら、これからの時代を生き抜くために必要な力を毎日の授業の中で身につけるようにしてほしい。 ・今後もPDCAサイクルを回しながら、検証・改善に努めてほしい。
豊かな心	自他を尊重する心情・態度を育てる	思いを受け止め認め合う児童	○安全・安心な風土の醸成 ・「南小スタンダード」を徹底する。 (挨拶・廊下歩行・言葉遣い・時間を守る・話の聴き方) ・月間目標の主体的な設定や取組交流と学校のきまり、生徒指導規定の見直しと改定を行う。 ○学級・学年経営を基盤とした支持的風土の醸成 ・教室環境を整え、生徒指導の4つの視点を生かした児童支援を行い、学習規律の徹底を図る。 ・児童会や委員会、各学年と連携し学年交流の充実を図り、意図的な活動や縦割り班活動等での児童同士のかかわりを深め、自己有用感を高める。	○Hyper-QUによる学級満足度 全国平均値との比較 ③ ○自己有用感に係る児童アンケート 肯定的に回答する児童の割合 「自分にはよいところがある」「よさを友達に認められている」 ④	全国平均以上 80%以上	QU16/18	QU15/18	QU83.3	B	○Hyper-QUの結果において、学級満足群の割合が全国平均以上が達成できなかったのは3学級である。また、学級不満足群の中の要支援群に位置する児童は13名いる。そのうち3名は4月から要支援群に位置したままである。 ○児童アンケート「自分にはよいところがある」「よさを友達に認められている」において、ともに肯定的評価の児童80%以上の学級は3学級であった。全校での割合は、「自分にはよいところがある」が72.2%、「よさを友達に認められている」が70.4%であった。4月と比較すると、それぞれ6.5ポイント、2.6ポイント低くなっている。	○Hyper-QUの結果を受け、集団と個の状態を把握して、それぞれに手立てを講じていくことで集団の中で個を、個から集団を高めていく。各学級が作成したQUシートを支援に生かしている。 ○学習集団づくり研修での学びを蓄積していき、教職員が互いに学び合い指導力を高める。 ○児童会が行った「ほかほかツリー」の取組等、児童が主体となって考える取組を継続して行い、児童どうしのつながりを深め、相手思いの心や感謝する心を育む。 ○朝会や学級活動を使ったり、学年会を開いたりして、教職員の思いを児童に積極的に伝えていき、目標に向かって高まっていこうという意識を向上させ、次学年へつなげる。	○			・児童会を中心に、児童が主体的に取り組んでいる活動が意欲深い。来校時に校内掲示を見るのを楽しみにしている。 ・不登校傾向の児童についてもしっかりとその原因や背景を把握・分析し、効果的な取組・着実な改善へとつなげていくことを期待する。 ・生徒指導事案・問題行動については、関係諸機関と連携して家庭に働きかけなどとして、今後も組織的にかつ迅速に対処してほしい。 ・Hyper-QUを活用し、学級等で役割をもたせやりきらせるなど、自己有用感や自己肯定感を高めるような取組を発達段階に応じて進めてほしい。
健やかな体	心身の強さと運動能力の向上を図る	切磋琢磨し高め合う児童	○楽しみながらできる体力づくりの推進 ・児童の運動量の確保に向けた体育科授業改善に取り組む。(基礎体力の向上・実技研修の実施) ・外遊びの励行と充実を図る。 ○食育の推進 ・栄養士による食育指導 ・給食のもりもりキャンペーンの実施	○体育科授業改善に向けた職員の 実技研修の実施 ・児童アンケート調査「体を動かすことが好き」の項目80%以上 ○食育指導 ・栄養士による食育指導を各学年年間1回以上実施 ・給食アンケート調査「苦手なものも食べようと努力した」の項目80%以上	実技指導・食育指導年間3回以上 アンケート調査肯定的評価80%以上	好き85.0%	好き85.3%	好き106.6%	A	○児童アンケート「体を動かすことが好き」の項目における肯定的評価は85.3%であり、目標値は達成することができ、前回アンケートよりも0.3%高くなった。 ○栄養士による食育指導を、全学年1学期に行うことができた。2学期も食育の動画を視聴するなど食に興味をもたせる取組ができた。 ○給食アンケート調査「苦手なものも食べようと努力した」が89.0%だった。目標は上回ったが、6月と比較して1.7ポイント低くなっている。	○体育科の授業に合わせて全校で縄跳びやマラソンに取り組んでいる。スモールステップで記録が伸びていくことがわかるため、意欲的に取り組んでいる。また、縄跳びやマラソンの解説動画を作成し視聴させることで、興味をもって取り組むことができるようになっている。今後も様々な動画を作成し、体を動かすことの楽しさを知らせていく。 ○3学期も栄養士を招聘してリモートにて栄養指導をしていただいた。栄養士の話や生産者の方を身近に感じられる出前授業等を計画的に取り入れ、次年度も引き続き食に関心をもてるようにする。	○			・給食の残菜が減っているのがとても良い。給食でしか出合わない食材等もあると思うので、食育も大切に進めてほしい。 ・休憩時間も外遊びをする児童が多く、体を動かすことが好きになる取組を工夫している結果であると思う。
信頼される学校	保護者、地域の願いに応え、信頼される学校づくりを推進する	健康でやりがいを持って勤務できる環境づくり	○コミュニティ・スクール導入に向けた環境整備 ・先進校視察や市教委との連携し、校内研修や全体構想立案を行う。 ・構成メンバーや委員長・本部長等の人選をする。 ・地域・保護者と連携し、地域人材を発掘する。	○コミュニティ・スクール導入準備会の開催回数 ⑥ ○勤務時間外の在校時間が年間360時間未満の職員の割合(目安) 前期…180時間以下 後期…360時間未満 ⑦ ○業務改善進捗評価アンケートによる全職員の3以上の肯定的評価の平均 ⑧	2回以上	2回	3回	150.0%	A	○コミュニティ・スクールに関する特設講座に参加し、先進校の実践を聞いたり、他校の先生と協議したりすることができた。 ○学校運営協議会委員が決定し、具体的な活動についての話し合いをスタートすることができた。	○令和6年度からのコミュニティ・スクール導入に向けて、今後も2回の学校運営協議会を計画的に実施し、組織や活動内容を具体化していく。	○			・コミュニティ・スクールについては、県や市教委のサポートを受けながら、ゴールのイメージを共有して共に取組を進めていきたい。
						在校時間68.7%	在校時間70.9%	在校時間88.6%	B	○管理職を除くと達成率は73.8%となり、在校時間の縮減に取り組むことができています。学校衛生委員会が協議した内容について学年会等で周知徹底を図ったり、退校時刻を視覚化したりしたことが終業時刻を意識した働き方につながった。 ○生徒指導や授業改善に組織的に取り組むことで、他の業務を効率的に行うことができた。ICT相談員との連携により、職員のICTを活用するスキルが徐々に向上してきており、授業づくりや日常の業務に生かされつつある。	○目的を明確にした学年会・部会等を効果的に実施させることで、取組の質を確保した業務遂行ができるようにする。 ○学校衛生委員会等で実態を把握し、働き方について教職員全体で熟識したり目標を設定したりし、主体的に徹底を目指すようにする。 ○生徒指導事案への対応を、今後も生徒指導主事を中心に組織的に迅速かつ効率よく進めることで、早期解決の実現と保護者の信頼度向上を図っていく。 ○長期休業中等に教材作成の電子データ化や共有化を進め、授業づくりに活用できるようにする。	○			・取組自体は適正であると思うが、先生方もライフワークバランスを心掛け、日々の職務を頑張らざるがままに進めていただきたい。

【j: 自己評価・評価】
A: 100≦(目標達成) B: 80≦(ほぼ達成) <100 C: 60≦(もう少し) <80 D: (できていない) <60

【l: 学校関係者評価・評価】
イ: 自己評価は適正である。 ロ: 自己評価は適正でない。 ハ: 分からない。